慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	松本芳夫著, 日本の民族(昭和二十九年, 慶應通信刊)
Sub Title	
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1955
Jtitle	史学 Vol.28, No.1 (1955. 4) ,p.126- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19550400-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

松本芳夫著　日本の民族（昭和二十九年 慶應通信刊）

松本芳夫教授の廣範な古代史研究上の業績のうち、特に多年に亘つて力を用いられたものゝ一に日本民族の研究がある。その主要な諸論攷が一册に纒められ、刊行を見るに至つたことは、在學中からこの問題に關する講義に列し得た筆者には感慨新らたなものがある。教授の研究は廣く史料を蒐集されると共に先學の所說を逐一檢討し、細緻を極めたものであり、その間考古、民族、言語などの諸學に關しても獨自の識見をもつて縱橫に批判を加えそれらの補助學に迷わされることなく、オーソドックスの文献史學的な方法を以て貫かれ、堂々の論が展開されているのである。恐らく今日において、この種の研究法を以てしては、本書に示された所說を拔くことは殆んど不可能と思はれるし、時にはそこばくの物足りなさを感ずるほど、穩健中正、奇きようの言を警しめる研究態度は、その結論を以て容易に動かし難きを嘆ぜしめるのである。

さて本書は第一日本の民族、第二土蜘蛛論、第三古代蝦夷論、第四熊襲・隼人論の四部より成る。第一日本の民族は著者自ら、

その序論において述べられたように概論的な、本書にあつては總論に當るもので、一九四八年本塾大學通信教育の教材として書かれたもの、以下土蜘蛛論は一九五二年「史學」二五の四に、古代蝦夷論は一九四三年同誌二一の三・四に、熊襲・隼人論は同じく一九四四年、二二の四に、それぞれ掲載された論文であつて、本書においては各論に當る。

日本の民族は更に序說、第一章日本石器時代人について、第二章天孫民族について、第三章歷史における諸族について、結語とに分れ、序說においてまず民族の意義を論じて「日本の民族」を「日本における諸民族」と定義し、それらの相互關係を論じて日本民族の成立と由來を明かにせんとする著者の意圖を明かにしている。特にその末尾において過去の日本民族論に往々にして見られた偏狹な獨斷論を排し、あくまでも公正な見解を正しい研究方法の上に求め、文献による歷史的研究の意義を重視する著者の確固たる研究態度を明かにされた點に注目すべきであろう。

第一章においては石器時代人が論ぜられるが、明治以來、多年論爭の續けられて來た「アイヌ說」「非アイヌ說」の諸說が克明に逐一檢討され、ついに今日贊同者の多い淸野謙次氏の非アイヌ說をも徹底的に批判して、石器時代人そのものの種族系統を明かにすることを得なかつたものと斷じ、石器時代人が既に單一な種族ではなく、混血した複合種族であろうと推論して、研究の困難

を指摘し、日本石器時代人論は、いまなお未解決というべきであると結ばれた。

第二章は日本民族の構成主體となす天孫民族（大和民族）の由來に關する論究にあてられている。こゝでは先ず神話を俎上にのぼせて敎授獨自の見解に基き、高天原をもつて他界觀念のあらわれにすぎぬとされ、この神話が現實の天孫民族の由來を尋ねる上に、なんらの示唆を與えるものでないことを說き、更に進んで各種の神話や、土俗や、言語を資料とした諸學說、卽ち北方、南方兩系統論の對立を詳細に吟味した結果、兩者ともその論據に首肯し得るものがあるにも拘らず、いづれか一方を是とし、他を否として決しがたいとの結論を得られた。而して、わが列島の地理的位置から推して、多くの種族が各方面より渡來したのであり、それには大別してアイヌ的要素の多いもの、ツングース系の濃厚なもの、インドネシヤ的色彩の濃厚なもの、の三種が認められるとし、それらが互に斗爭し、或は融合して次第に淘汰され、より大なるものに統合されるに至つた。卽ち天孫民族は各地に散在した地方的勢力のうち、あらゆる點において最も優勢、優秀なるもので、その天孫民族が立てた大和朝廷が他のすべての地方的勢力を統合して日本國家を建設し、あらゆる他の人民をを同化融合して日本民族を成立せしめたと說かれるのである。

かゝる著者の日本民族成立論は、結果において必ずしも喝采を博するものではないかもしれぬ。むしろ一見弱々しく感ぜられるかもしれない。筆者が冒頭、不遜な言辭を弄したのも、この點を指したものである。しかしながら委細に檢する時、われわれは果して今日、この所說を完全に覆し得るだけの確實性に富んだ反論を加えることが出來るであろうか。否、却てこゝに著者の毅然たる研究態度、公正な研究法と見解とを見出し得るのではなかろうか。

第三章歷史に於ける諸族は、第二部以下に詳論が載せられているから、あわせて述べるべきであろう。但し、こゝでは歸化人についても觸れられていることを注意しておく。

第二部土蜘蛛論は古書に現われた「土蜘蛛」がいかなるものであつたか、を詳細に論ぜられた論文で、やはり古來の土蜘蛛に關する記述、乃至は諸說を綿密に調べた上で、これに關しては、一として確實な史實と認むべき資料が見當らないが、異族としての觀念が極めて强いことを指摘し、土蜘蛛をもつて「天孫民族の異族に對する汎稱」と斷ぜられた。これもまた、現在妥當な見解といわざるを得ないであろう。

古代の蝦夷は天孫民族、大和朝廷に對して最後まで反抗をつづけた最强の異族として、我々の最も注目をひく種族である。古代蝦夷論はこれに關する詳論であるが、結論をいそぐと、蝦夷の多毛という體質的特徵をはじめとして、風俗習慣、言語の類似、特

に金田一京助氏のアイヌの古語エムチュウがエミシに轉訛したとする説を重視して、蝦夷がアイヌに非ず、とする論據がとるに足らないことが立證されると説き、蝦夷に關する限り、斷固として蝦夷アイヌ説を唱えられた。著者がこの諸説に對して、いかに自信に滿ちて居られるかは、この論攷の末尾に加えられた追記において、その後も長谷部言人博士がその著書で蝦夷非アイヌ説を再三主張しているが、私見に影響するほどのこともないので、あらためて論評をしない、と言いきつておられるのにも明かである。筆者もさきに驥尾に附して、この問題につき、やゝ異つた觀點から考察を試みたことがあるが、結果は全く同一となつたのであつて、著者の蝦夷アイヌ説が動かし難いことを信ぜざるを得ないのである。なお著者は更に國栖にふれて、これが土蜘蛛と同じく異族の汎稱であることを立證し、つゞいて大化以前における蝦夷の記事を検討して津田左右吉博士の説を駁し、その多くがいくばくかの史實を傳えるものであることを明かにされている。

天孫民族が異族と認めたものに、なお熊襲と隼人が殘されている。著者の兩者に關する見解は第四熊襲・隼人論に述べられている。卽ち兩者は同一の種族を指したものであり、前者は地名から出た稱呼で、その地方が平定されると共に、その名もすたれ、以後は隼人と呼ばれるようになつたのであつて、この二つの名稱は年代の差に基くことを論じ、またその天孫民族との體質的な差異

はあまり明かではないが、少くとも異族として認められるに十分な、容貌の相違があつたと考え、彼等の歌舞や狗聲をとり上げて、風俗習慣にも異つたものゝあることを認め、しかも彼等が元來集團的勢力を九州の一角に占めていたことを結論された。今日の考古學は未だその當否を十分明かにし得るに至つていないが、この所説もまた容易に崩し得るものではない。

かくて本書は松本教授が長年に亘つて努力を傾けた末到達された、繩紋式石器時代人をはじめ、我國に跡をとゞめた多くの種族に關する研究成果の集大成であり、進んで最後の目標たる日本民族の成立を論じた力作である。繰返し述べた如く、その一々の所説は、今日可能な窮極に達した感があり、オーソドックスの史學の頂點に立つものと云えよう。某誌の評者は最近の諸研究に觸れること少く、特に考古學上の成果を引くに乏しい點を擧げたが、それらが却てこの著に加えること少きを嘆ずるのみである。われわれとして、なすべきことは、むしろ著者とは別の、新しい觀點を見出し、これらの諸問題に新たなる展開を求むべき一事ではなかろうか。本書が一人でも多くの人々に讀まれ、明日の進展への出發點となることを祈るものである。

（淸水潤三）